

陸象山の學統

著者	内藤 由己男
雑誌名	漢文學會々報
巻	7
ページ	29-47
発行年	1938-03-17
URL	http://doi.org/10.15068/00146843

陸象山の學統

内 藤 由 己 男

陸象山は撫州金谿（江西）の人、幼時より儒異であつて、五十四才荆門（湖北）に没する迄、或は出仕して官にあるも、或は家居して講授に當るも、常に特異の學風を唱道して一世に重きをなし、人遂に之を稱して陸學といふに到つた。

併し象山は、名家の門に贅を執つて師事したことはなく、重に家學と國學とを以て我が學をなしたのであるから、師授直傳に依る學統といふものはないわけである。併し私淑する所をわが師としてその學を絶代につぐと云ふ意味に於ては、學統ありと云はねばならぬし、更に又象山自身には自覺的積極的に或學の繼承發展に努めたりと云はぬにしても、客觀的に研究して、その先行する學者、學派學風中に之に類似するものがあり、且相當の影響を及ぼせりとせられるものが存する場合は、これ又學統ありと云はねばならぬ。

以下かゝる意味に於て、陸學の先河と思はれるものにつき少し研究してみたい。

第一節 孟子

儒教の道統に關する象山の所見は、その全集中所々に散見するのであるが、その言ふところを要約すれば大體次の如くである。

即ち堯舜の道を傳へたものは孔子であり、孔門に於ては顏子に傳はりし學は亡びて後世傳らず（註一）、子游子夏に關しては論語編纂等に關しその功績は認めるも、その傳ふる學は専ら文學の壇場で、聖門の傳道としては嫌焉たるものありとし（註二）、獨り曾子その正傳を得てゐるとする。（註三）

曾子は之を子思に傳へ、子思より孟子に傳つた(註四)、夫子の道は、孟子に至つて又光大となつたのである。孟子以後千有五百年の間、儒を以て大名あるもの荀、揚、王、韓等があるが、是等は取るに足らずとなし、象山は直ちに孟子を繼ぎ、聖學に列するを以て己が任とした。

然らば、孟子の如何なる點を善しとして之に私淑したのであるか。

象山は經書中最も孟子を重んずるが如くであつて、常に之に言及し、又援用し、人の「先生之學、亦有所受乎」と問へるに對しては、「因讀孟子而自得之」(全集卷三十五語錄)と述べた程であつたが、その孟子に重んずる所の最たるものは、性善説と養氣論とである。

象山が孟子の性善説を重んずる事は

、故孟子道性善、發四端、曰人之有之、而謂不能者自賊者也、謂其君不能者、賊其君者也云々(同卷十九宜章縣學記)

孟子曰、言人之不善、當如後患何、今人多失其旨、蓋孟子道性善、故言人無有不善、今若言人之不善、後將甘爲不善、而以不善向汝、汝將何以待之、故曰當如後患何、(同卷三十四語錄)

孟子登東山而小魯一章、納繹誦詠五六過、始云皆是言學之充廣、如水之有潤、日月之有光、皆是本原發得如此、

(同卷三十四語錄)

の如きを始めとして、其所論中屢々孟子の性善論、四端論擴充論を援用してゐる事に依つて明かであるし、又、養氣論に關しては、

告子一篇、自牛山之木嘗美矣以下、可嘗讀之、其浸灌培植之益、常月深日固也(同卷七、與郡中京)

志壹動氣、此不侍論、獨氣壹動志、未能使人無疑、孟子復以蹶趨動心明、則可以無疑矣、故不但言持其志、又

戒之以無暴其氣也云々（同卷三十四語錄）

牛山之木曾美矣以下宜諷詠（同右）

等を如めとして、孟子の存心養氣の説を常に援用して、自分の所論を進めてゐる事が非常に多く、以てその如何に孟子を重視してゐるかを見ることが出来るのである。なほ性善論養氣論の外、象山の孟子に言及してゐる事は枚舉に暇がない程で、或は「先立其大者」と云ひ、或は「萬物皆具於我」と云ひ、或は義利の別を論じ、或は知言を重んずる等、陸學の骨子となつてゐる主張は殆んど孟子より攝り來りたるかの觀がある。故に象山も自ら「我學は孟子を讀むに因りて之を得たり。」（前出）と言つてゐる程であるが、是等の孟子の學を、象山が如何に攝取し如何に活用し、如何に發展させてゐるかは、今こゝに詳論する紙數がないのである。

以上は主として學說上より孟子と象山との關係を検討したのであるが、更に兩者の關係は、その性格上に於ても亦非常に類似的であることを見出すのである。孟子全篇に横溢してゐるかの霸氣、何物と云へども之に對する者は駁撃し説得せずしては措かない意氣、及び盡心末章に述べられたる聖學を絶世に繼がんとせるその自信、これらは、亦象山の場合に甚だよく似てゐる、かの「取二三策而已矣」（象山全集卷三十二）に於て、孟子の「盡信書不如無書、吾於武成取二三策而已矣」と喝破せるに加増して、「一斷之以理」と云ひ、更に「如皆不合於理、則雖二三策之寡、亦不可得而取之也」と強勢してゐること、又「孟子亦激作却不離正道」と孟子の骨頂を道破してゐること等を考へ合すれば、孟子の積極的熱情に如何に共鳴してゐるかを知る事が出来るであらう。

孟子象山共に高邁峻險の性格を持し、俊敏の頭腦を以て一刀兩斷的の論法を得意とする事を知れば、象山が孟子の學統を繼ぐと自任してゐるのも十分了解する事が出来るであらう。

註一、顔子聞仁之後、夫子許多事業皆分付顔子了、故曰、用之則行、舍之則藏、惟我與爾有是、顔子沒、夫子哭之曰、天喪予、、然夫子所分付顔子事業、亦竟不復傳也、（象山先生全集卷三十四、語錄）

注二、王肅鄭康或謂論語乃子游子夏所編、亦有可攻者、如學而篇子曰次章、便載有若一章、又子曰而下、載曾子一章、皆不名而以子稱之、蓋子夏輩平昔所尊者此二人耳、（同卷三十五語錄）

先生云、子夏之學、傳之後世尤有害、（同卷三十四語錄）

宰我子貢有若、其才智最高、子夏子游子張、又下一等、然游夏已擅文之場、
我子貢有若猶不在此位、況游夏乎、（同卷二、與李省幹二）

注三、如高子羔曾子、雖有愚魯之號、其實皆夫子所喜、於二人中尤屬意於子羔、不幸前夫子而死、不見其所成就卒之、
傳夫子之道者、乃在曾子、（同右）

注四、自曾子傳之子思、子思傳之孟子、乃得其傳者、外此則不可以言道、（同右）

幸曾子傳之子思、子思傳之孟子、夫子之道、至孟子而一光、（同卷三十四、語錄）

第二節 程明道、附林竹軒、王震澤

陸象山の宋儒間に於ける學統關係を見るに、前述せる如く有名な宋儒の門に入學したことは絶えて見えないから、師弟授受の關係に於ける學統といふものはないわけである。故に全組望も「象山之學、本無所承」（震澤學樂）といつてゐる。併し直接の授受關係はないにしても、陸學の先河をなしてゐると見做し得る學者は、宋儒の中にも必ずありとするのが穩當であらう。

今宋元學案中に象山學案を見れば、

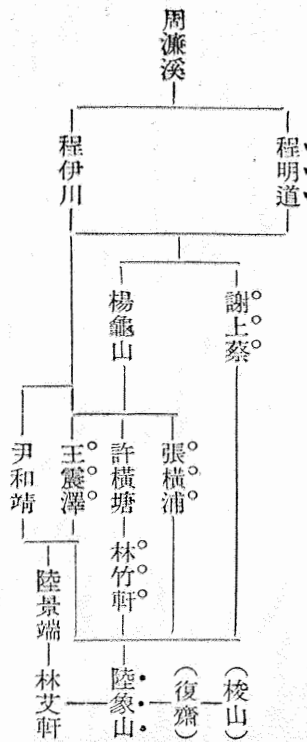
陸九淵（象山） 艾軒講友

上蔡、震澤、橫浦、竹軒續傳

と見えて居り、同卷祖望謹案には、

程門自謝上蔡以後、王信伯(震澤)林竹軒、張無垢(橫浦)至林艾軒皆前茅、及象山而大成、

と見えてゐる。然らば今、明道、伊川、上蔡、周許、諸儒、橫浦、和靖、震澤、艾軒學案に依つて、陸學の先河となるものを調べて見れば、凡そ次の如き表を得るのである。



象山學案に於て陸學の先河をなせりと云つてゐる上蔡、震澤、橫浦、竹軒には前表中に○印を附しておいた。この四家の中で重きをなすものは上蔡と橫浦であるから、この二家については次節以下略説を試みたい。

竹軒は周許諸儒學案に見えてゐるが、祖望謹案に

先生兄弟(弟は叔豹)遺書不傳

とある如く、その學統の詳細を知ることが出来ない。全祖望は一首の詩を掲げて、そして「則已開象山宗旨矣」と斷じてゐるが、その詩は次の如きものである。

送虜仲淋 直閣(竹軒)

儒生底周苦知書、學到根源物物無、

曾子當年多一唯、
水流萬壑心無競、
把手沙頭莫言別、
與君原不隔江湖、
顏淵終日只如愚、
月落千山影自孤、

詩中云ふ所は、天地無心にして而も理一萬殊を現はす事を述べ、依つて曾子の唯と云へる一貫の學を稱し、萬殊を力めて知書に苦むことを貶してゐるのであるから、陸學の先河と稱するも妄論ではあるまい。

震澤については、震澤學案にその路説が見えて居る、その祖望謹案に言ふ所は、

信伯（震澤）相爲龜山所許、而晦翁貶之、其後陽明又最稱之、予讀信伯集、頗啓象山之萌芽、其貶之者以此、其稱之者亦以此、

と記してゐる。其の如何なる點が象山の萌芽と見なされるかと言ふに、嘗つて祕書省正字たりし時、詔に應じて陳言したる時、

堯舜禹湯文武之道、相傳若合符節、非傳聖人之道、傳其心、非傳聖人之心、傳己之心也、己之心無異聖人之心、萬善皆備、故欲堯傳舜以來之道擴充是心焉耳、（震澤學案所引）

と奏してゐるのを見れば、その所論が如何にも主觀的唯心論的であつて、象山同調たる事を十分納得することが出来るであらう。

而して、震澤記善錄中の次の辭章の如きは、又如何にも禪臭を帯びて居ることを知り得るであらう。

問浩然之氣、塞乎天地之間、曰洞達無間、豈止塞乎天地、

問如何是萬物皆備于我、先生正容曰、萬物皆備于我、某于言下有省、

盡心知性以知天、更須存養矣、其次則欲存心養性以事天、
斯様な次第であつたから、朱子は「其不過一識伊川之面、而所記都差」と云つて震澤の學を貶したのであらう。

次に程明道について陳説することとする。

宗元學案中には、明道を斥して象山の先河と明記した所はない。併し象山自身の言辭、後世學者の評論、及び明道の文辭を案讀するに、單に明道は上蔡の師であり、又横浦震澤の師なる揚龜山の師であると言ふ關係のみとは考へられない。宋代に於て陸學の前蹤を尋れば、必ず程明道迄遡江するを要する。凡そ宋學一般は、明道を父とし、伊川を母としてゐると稱するも過言ではないが、その中、朱子が多く伊川を傳へたいと云ふに對し、陸子多く明道を傳へたりと云つてもよいであらう。

象山の二程子に言及せる事は、その全集中二三見出し得る。

伊川蔽鋼深、明道卻通疏（卷二十四、語錄）

右は伊川を貶して明道を譽してゐる。

二程見周茂叔後、吟風弄月而歸、有吾與點之意、後來明道此意却存、伊川已失此意、（同右）

右も亦伊川を貶し、明道を稱してゐる。この伊川に就ては重ねて之を貶した事は見受けるのであるが、之を稱してゐることは絶無である。（注一）何故に伊川を貶するかと云ふに、自覺若傷我者（注一）と稱してゐるに依れば、伊川の語の分析的説明的煩瑣的なるを斥して云へるものと思はれる。之に反し明道を稱してゐるのは、通疏と言ひ、有吾與點之意と言つてゐるから、その統觀的、體得的なるを好みしてゐるものと云つてよいであらう。併し只通疏と言ひ、曾點之風と云ふのみでは餘りに漠然としてゐて不十分であるから、明道學案、河南程氏遺書、二程文集、上蔡語錄等に依つて

明道の象山に相通する次第を探索して見たい。

先づ識仁篇を見るに、「學者須先識仁」と冒頭に主旨を下し、「天地之用、皆我之用、孟子言萬物具於我」と天人合一の思想を述べ、更に進んで「良知良能元不喪失」と人性の本来を高唱する所、理會透徹し論旨高邁であつて、孟子を繼ぎ象山に傳ふるの概あると言ふ事が出来る。即ち象山が「先立大者」と稱して人天同根の善を唱道し、又「宇宙内事已分内事」と云ひ、或は孟子の良知論を演繹論議してゐる所を見れば、識仁篇は思想的に良く陸學に近似してゐるのである。かゝる次第を知りてか知らずしてか、朱子は識仁篇を以て地位高者之事として、彼の近思錄中には之を除いたのであるが、亦その見地をよく守るものと云ひ得るであらう。

右識仁篇の中に見えたる明道の唯心論的立場に於ける天人合一思想に關しては、河南二程遺書中にも彼此屢々見出し得るのであつて。

萬物皆備於我矣、反身而誠、樂莫大於焉、

大人者與天地合其德、與日月合其明、非在外也、

(第十一明道先生語)

の如さその一例にすぎない。勿論二語ともに明道の始めて言出せる語ではなく、前者が孟子より後者が易より借り來つてゐることは既に明らかなことである。

併し

曾子易簣之意、心是理、理是心、聲爲律、身爲度也 (同卷第十三、明道先生語)

とあるは、明道の獨自に云ひ得たる語であらう。心是理、理是心の語こそ唯心的世界觀を最もよく云ひ得てゐるものであつて、やがてこの語は象山に至つては「心即理」と云ひ出される事となり、陸學の重要な支柱となるのである。

又、易簡の論に就ては、

先生(明道)曰、凡事皆有恁地、簡易不易底道理、看得分明何勞之有、易曰、易簡而天下之理得(上蔡語錄上卷)とも言つてゐる。

以上の諸例によつて略々明道の學が唯心論的であり、且つ情意的である事が明かとなつたのであらう。かゝる學風の明道であつたから、詩を云ふに當つても、決して章解句釋する事なく、優游玩味し吟じ來り吟じ去つて、その中自ら自得すると云ふ風であつた。(注二)これは伊川が理智的解釋的學究的の學風を成したるとは寧ろ對蹠的關係をなしてゐるのであつて、明道のかゝる爲學に於ける基調が象山まで流れを引いてゐるのである。震澤學案の祖望謹案に、王信伯、陸象山、及び王陽明一派の學風は、程門既にその萌芽を包藏してゐる事を述べてゐるが蓋し妥當の評言であらう。

朱子は明道門下の上蔡、龜山以下禪臭を帶びたる者の輩出したるを論じて、彼等が師學を誤り傳へたるが如く言ひ、程門にはかゝる學風の存するなきが如き口吻を洩してゐるのであるが、(注三)明道に一味禪的色彩あることは疑ふ餘地なく、又一步譲つて禪的とは云はなくとも、唯心的一貫の學は儘かに明道の定調であつて、その流れに上蔡、龜山、象山等の輩出せるは最もいはれありと云はねばならぬ。然るが故に、黃宗羲も右の朱子の評に報いて、

朱子得力於伊川、故於明道之學、未必盡其傳也(明道學案)

と言つてゐるのである。

右は學問思想上に於て明道、象山の關聯を探究したのであるが、次に性格上に於ける兩者の關聯は如何であらうか。

明道學案祖望謹案によれば、明道は顏子の風ありと言ひ、百家謹案には伊川と比較して次の如く云つてゐる。

二程子雖同受學濂溪、而大程德性寬宏、規模闊廣以光風霽月爲懷、二程氣質剛方、文理密察、以削壁孤峯爲體、其道雖同、而造德目各有殊也、

明道に就きて德性寬宏と言ひ、伊川に就きて氣質剛方と言へる所を見れば、性格的に象山に近似せるは、明道に非ず

して寧ろ伊川であるが如くである。併し次に、明道に就きて規模闊宏と言ひ、伊川に就きて文理密察と言へるを見れば象山はむしろ明道に近く、文理密察と言ふは却つて朱子に該當する事に氣がつくであらうし、又光風霽月と削壁孤峯とを見れば、象山は二者共に兼有してゐると言はねばならぬ。

要するに、程明道と陸象山は、性格的には酷似してゐるとは云ふ事が出来ぬ。明道は顔子に似、象山は孟子に似たりと言へば、兩者の異同は忽ち明瞭となるであらう。故に同じく唯心的統觀の學と云ふも、象山に到りては明道よりも一歩高峻の風氣を帯びて來るのである。

注一、先生（象山）獨謂簡曰、艸角時聞人誦伊川語、自覺若傷我背、亦嘗謂人曰、伊川之語奚爲與孔子孟子之言不類、

（象山全集卷三十三、象山先生行狀楊簡）

注二、明道先生善言詩、他渾不曾章解句釋、但優游玩味、吟哦上下、便使有得處、（上蔡語錄上卷）

注三、朱子謂程門高弟、如謝上蔡游定夫揚龜山下、稍皆入禪學去、必是程先生當初說得高了、他們只睥見上一截、少下面着實工夫、故流弊至此、（明道學案）

第三節 謝上蔡

程門の學は一方謝上蔡より陸象山に流れ、他方楊龜山より朱子に到つてゐると言つてよい。上蔡、龜山、兩人の異同は宋元學案中次の如く見えてゐるからその概略を知ることが出来る。

祖望謹案、謝楊二公、謝得氣剛、楊得氣柔、故謝之言多踴厲風發、楊之言多優柔平緩、（上蔡學案）

さて、上蔡は明道、伊川兩者を師としたのであるが、上蔡語錄を見るに、明道に言及せる事頻出するに反し、伊川に言及すること甚だ稀である。これ上蔡が伊川よりも多く明道に啓發された事を物語つてゐるのであらう。

上蔡は明道に師事中、或はその博聞強記誦該博なるを玩物喪志と戒められ、（注一）或は師の言語を學ぶことをやめて靜生すべき事を教へられ、（注二）或は靜敬を以て身を持すべきことを教へられ、漸くその學成る所あり、遂には

その學師承よりは一步出づるところありしが如くであつて、朱子の如きは、別に一家を成したりと稱してゐる。(注三) さて上蔡が明道に受け、やがて又象山に傳はりたりと思惟せられる學風は如何なるものであつたか。

第一に、その孟子を推尊せる事を云はねばならぬ。上蔡は顔子と孟子とを比較して、「人之氣質不同、顔子似弱、孟子似強」(上蔡語錄上卷)と言ひ、更に又、「顔子學得親切、如孟子仰之彌高、鑽之彌堅、無限量也」(同上)と云つて推尊孟子の態度を明らかにしてゐる。その孟子の學にとる所は種々多方面に互つてゐるが、就中、「浩然之氣」、「勿忘勿助長而正」、「仁人心也」、「盡其心知性、盡其性知天」等の語が頻出することが目につくのである。これ孟子の唯心論的宇宙觀を肯定し、存心養性の法に由つて自他一如の境地に至らんことを期する上蔡の學風が然らしめるのである。

第二、上蔡の一元論的統觀の學は、只孟子を引くのみには止らない。上蔡語錄中卷に次の如き語が見ゆるが、

學者且須是窮理、物物皆有理、窮理則能知天之所爲、知天之所爲、則與天爲一、無往而非理也、
學須先從理上學、盡人之理斯盡天之理、學斯達矣、

天理也、人亦理也、循理則與天爲一、與天爲一、我非我也、理也、理非理也、天也、

何れも天人一貫の實在を理となし、理に到れば天を知り、天を知れば人天一如の自由無碍の境地に至り得ることを説いてゐるものである。

伊川、朱子の學風に於ては理氣二原論の傾向を帶び、觀相的には理に悟入することを取り、修養的には養氣の論をなし兩者の關係に於て非常な複雑な學を構成してゐるのであるが、明道、上蔡、象山の學風は一元的大乘論の立場に止つてゐるのである。

かゝる唯心的一元論を強調する時は、禮の規矩の如きは自然無視されがちになるので、

禮者攝心之規矩、循理而天則動作語默、無非天也、内外如一則視聽言動無非我矣、(上蔡語錄上卷)

の如き禮の本義たる外面的規格より内面的整齊に至るべきものを、コペルニクスの轉換を行つて、心さへ理に循へば、

舉措は自らにして禮に叶ふと言ひ去つてゐるもので、古聖賢の禮治の教からは早晩逸脱する傾向を己に胚胎してゐるものと言へるであらう。

第三、かゝる大乘的見地に立つに至れば、大者に志すと云ふことが必須なこととなつて來る。

若能志於大者遠者、不爲目前移奪、雖是非小有失、大體固已立矣、不失此心可也、（上蔡語錄下卷）

の如き、大者に志し大體已に立てば、是非の少しく失當ありとも意に介するに足らずと云ふのであり、又

門人有初見請教者、先生曰、人須先立志、志立則有根本、（同中卷）

の中に云ふところの立志とは、即ち大體に志を立つる事を斥して言つてゐるのである。

然らばその言ふ大體とは何ぞや。それは前述の天人同貫の理であり、又心即理とも云へば心と言ふも同じである。

第四、實學

實學と云へば、普通に陸王の學を指して言ふのであるが、上蔡にも己に早く實學の風が存するのである。

開見之知非眞知也、知水火自然不踏、眞知故也、（上蔡語錄中卷）

と言ひ、又

今之學須是如饑之須食、寒之須衣始得、若只欲彼善於此、則不得、（同右）

と云つてゐるを見れば、身に切實なる眞知を得べきことを力説してゐることが分る。又、

先生曰、眞儒不到得窒礙、不能變通乃腐儒爾、（同右）

と言つてゐるのを見れば、一旦眞知を得たるものは、自在無礙なるを得るといふ信條を持してゐることが分る。

さて朱子は上蔡の實學について、

問上蔡議論莫太過、曰（朱子）上蔡好事上理會、理卻有過處、（同右増録）

と云ひ、上蔡も亦河南程氏の許を去るに當りて尹子に告げて、

吾徒朝夕從先生、見行則學、聞言則識、（上蔡語錄中卷）

といつて事上理會の事を語つてゐるが、この事上理會と、かの無礙なる眞知とは如何なる關係に立つてゐるか。

朱子は眞知と同一事を知實理と云ひ、近思錄出處篇にも伊川語を採用して知實理の須要なことを説いてゐるのであるが、前述の如く上蔡の事上理會に關しては、「理卻有過處」と言つて之を卻けてゐる。然らば朱子は、眞知と事上理會とを必然的連關に立つものと考へてゐないが如くである。これは正に重大問題であつて、速斷を慎しまねばならぬが、朱子は象山の學に對しても、

于踐履中要人提撕省察、悟得本心、此爲病之大旨、（梭山復齋學案）

と言つて踐履中に本心を悟得することを以て之を病と稱してゐるのであるから、事上理會を正學と認めない事は争へない事實としなければならぬ。之に反して上蔡、象山等にありては、眞知なるものは、見聞に得られず、讀書講學に得られず、獨り實踐中に於て悟入するを以て眞に理會し得るものとするのである。

第五、禪學的

上蔡は仁を説くに覺を以つてし、又生意を以てし、誠を説くに實理を以てし、敬を説くに常惺惺を以てし、窮理を説くに求是を以てし、その説く所如何にも創見に富んでゐるのであるが、中には如何にも禪臭を帯びたものが見出されるのである。仁を覺となすもその例であり、又敬を常惺惺と云ふも、「瑞巖和尚每日常自問主人翁、惺々否」の如く、禪家の常語なるを以て、當時の人已に上蔡の語を禪學と云ふ者があつたほどである。（上蔡語錄中）

なほ、

出辭氣者、猶佛所謂從此心中流出、今人唱一諾、不從心中流出、便是不識痛癢、（上蔡語錄上）

伯淳嘗有語、學者如登山、平處孰不濶歩、到峻處便住、佛家有小歇場大歇場、到孟子處更一住、便是好歇、（同右）の如く佛者の言を採用して儒を解すること多く、その他陰に陽に禪家の言辭を弄する所が多いので、朱子は次の如く之

を評してゐる●である。

上蔡之學初見其無礙、甚喜之後細觀之、終不離禪底見解、（上蔡語錄上增錄朱子語）

伊川門上蔡自禪門來學、其亦有差、（同右）

上蔡觀復齊記中說道理、皆是禪底意思、（同右）

上蔡に禪臭のあることは、程門既にその胚芽ありしに由來することは上述の如くであるが、上蔡等に至つて更にそれに拍車をかくる様になつた事は又爭はれない事である。下つて象山に至れば、こゝに反省的態度をも現れて、儒禪の異同に關し批判的見解を有し、釋禪を異學として明確に區別してゐるので、儒佛異同に關して一言も費して居らぬ上蔡よりは儒的に立直つてゐるのは衆人の認める所であるが、勿論象山と雖も、時代思潮として澎湃として押寄せ來れる禪學に感染せざるを得なかつたのは、又己むを得ない次第である。象山の禪臭に就いては別に詳論する事を要する。

以上は上蔡の學問思想に於て、象山の先河たる所以を尋ねたのであるが、以下少しく人物上より兩者の關係を探究して見たい。

上蔡學案、宗義案には、「上蔡在程門中、英果明決」と評して居り、明道が初めて上蔡を見た後、人に語りて彼を秀才と稱してゐる事も上蔡語錄中に見えてゐるから、上蔡の才氣高逸であつた事は疑ひないことである。さて、前に述べた所の、上蔡の記誦該博なるを明道が玩物喪去と戒めた話は、才子上蔡の弊處を物語るものであるが、伊川も亦上蔡の才高き所に病ありと喝破したのである。伊川謝子と別れること一年、謝子に、「相別又一年、做得甚工夫」と問へるに、謝子答へて、「也只是去箇矜字」と云つたのを伊川評して謂ふには、「門人之病痛不一、各隨所偏去、上蔡才高、所以病痛、全在矜字」（上蔡語錄上卷）とあるがそれである。上蔡その才高き故を以て、或は玩物喪去と言はれ、或はその病痛矜字にありと言はれたが、更に彼にはやゝ高慢の風もありしが如く思はれる話が上蔡學案中に見えてゐる。それは、上蔡が應城縣の知であつた時、胡安國が湖北の監司として巡察に來たことがあつた。安國は遂に於て上蔡に書を遣して

その事を知らせたのであつたが、上蔡は遂に出でて之を迎ふことなく、爲に土地の吏民皆その知縣が監司を慢輕するに驚いたと言ふのである。(上蔡學案附錄、謝山論) 蓋し、上蔡、安國は共に講友の關係であり、且つ安國は上蔡に比して二十四年の少輩であつたがためであらうが、現在上官と下吏の關係に立つてゐる以上、上蔡の所爲は驕慢の詆を免かれぬであらう。かゝる性格は、顔子を弱とし、孟子を強とし、且如孟子仰之愈高鑽之殊堅、無限量也と云つて孟子を推してゐる所にも現はれてゐるのである。

朱子は

上蔡說一轉而爲張子韶、子韶一轉而爲陸子靜、上蔡所不敢衝突者、子韶盡衝突、子韶所不敢衝突者、子靜盡衝突、

(上蔡語錄中卷增錄朱子語)

と稱して、上蔡も子靜に比すれば、なほ溫和の方なりし如く、言つてゐるが、同時代に技術をもつた陸子靜の強驕に就いては、朱子身を以つて痛感したことであらうから、右の評論にはかに鵲容みすべきものではあるまい。ともあれ、上蔡と象山とは、性格的にも共通性ありし事は十分知られてゐるのである。

注一、明道見謝子記聞甚博曰、賢卻記得許多、可謂玩物喪志、謝子被他折難、身汗面赤、先生曰、只便是測隱之心、明道玩物喪志之說、蓋是歲上蔡記誦博識而不理會道理之病、渠得此語、遂一向掃蕩、直要得胸中曠然、無一毫所能、則可謂矯枉過其正矣、(上蔡語錄中卷增錄朱子語)

注二、明道一日謂之曰、爾輩在此相從、只是學某言語、故其學心口不相應、盍若行之、請問焉、曰且靜坐、

(上蔡語錄下卷)

注三、游楊謝諸公當時已與其師不相似、卻似別立一家、(上蔡語錄中卷增錄朱子語)

第四節 張 橫 浦

橫浦名は九成、字は子韶、橫浦又は無垢と號した。楊龜山の門に入つて學んだのである。龜山は程學の門徒であつて、

その醇和の氣象は深く明道の愛する所であつたと云ふ、同じく程門の徒上蔡が才氣高峻であつて卻つて伊川に近似せる氣象を以てして、而も渾然たる明道の學を傳へやがて陸學の先となつたのに對して、龜山が性格的には寧ろ明道に似て居り乍ら、而もその學三傳して朱學を醸成せるは一見怪訝に思はれる様である。併し、龜山は一面こゝに言ふ横浦をも養成して陸學の先ともなつてゐる。なほ又、前に述べた王震澤も同じく龜山門下の人であるから、龜山にもかゝる學調が既に存してゐたものとせねばならぬが、こゝに詳説することは略したい。さて、横浦は「龜山弟子以風節光顯者、無如横浦」(横浦學案祖望謹案)とある如く、龜山門下にあつて、風骨を以て聞えてゐた様である。

その學は明道、上蔡に類する所多く、先づその孟子を推尊する事人後に落ちざる次第は、

或問孔子言性相近也、不明言其實、孟子乃曰、人性善何也、先生曰、孟子源流甚正、認得不錯、但人不之思耳、

(横浦心傳)

と云つて、孟子の始めて人性善と云ひ破つた事を、認得不錯と稱して居り、又

孟子于古聖賢中、獨發一養氣之說、卓然超越、議論深邃、如言勿忘勿助長、言是集義所生、言配義與道、言至大至剛意直養無害、皆自其平日踐履工夫中來、豈人所髣髴形似所得者耶、(同右)

といつて、孟子の始めて養氣説を唱へ出したるを絶讃してゐる所に見出す事が出来る。

次に横浦の實學を重じてゐたことは、右の孟子推尊の辭章中、かの養氣説を斥して、その平日踐履中より之を得來つたものと斷案してゐる所に窺ふ事が出来るし、更に又、徒らに讀書するを卻けて、風格ある文士と時々面識語話する事に依つて一種の氣象を得來ることを説き、實學といふても終日時事に應接するのみでは、却つて適意の處少し等と周到に説き得てゐる等も、亦その如何に眞の實學に造り得てゐるかを知り得るであらう。

次に横浦心傳中に、

或問、所見與所守、二者孰難、先生曰、所見難、

とある。見る所と守る所と比較して、見る所を重んずるといふのは、一應の理解では、實學といふものと、矛盾するが如く感ぜられはしないだらうか。併し實學とは單に身體的動作の上に立つと思推すべきものではない。又こゝに云ふ見る所とは、單なる見聞をさして言つてゐるのでもない。若し一步前進して、見る所といふのは、實理に關する言であり實學といふのが、眞知を求めてゐるものなることを了解すれば、所見難しと云ふこと、必ずや實學の立場に矛盾なき事を理會し得るであらう。

次に又この「見る所、守る所より難し」と云ふ言は、かの「大體を立つ」と言ふ思想と完全に符合することを知らねばならぬ。眞に實理を見得て、その切實なること、かの水火を恐れるが如くであつたならば、こゝに大體立つのであつて、守るといふことしかく努めずして自ら失はざるに至るのであり、小者又自然に之に従ひ來るのである。故に見る所を難しとし、大體を立つるを重しとするのである。左掲の言辭も、大者を識ること即ち修身行己に外ならぬ事を述べてゐるのである。

或問、科學學亦壞人心術、近來學者唯讀時文、事剽竊、更不會理會修身行己、是何事、先生曰、汝所說、皆凡子也、學者先論識、若有識者、必知理趣、孰非修身行己之事、(橫浦心傳)

さて、横浦も又禪學に墮せりと言ふ批評がある。今その代表として、横浦學案附録中に見る黃東發の評言を和釋して掲げて置くこととする。

「横浦先生憂深にして懇切、堅苦して特立し、近世傑然の士なり。惟杲老に交游し、佛學に漫淫し、孔門の正學に於て、未だ必ずしも非に似たるもの無くんばあらず。學ぶものその人を尊ぶと雖も、而も其說を審かにせざる可らず。其所謂心傳錄と言ふものあり、首に杲老を載せ、天命之謂性を以て清淨法身となし、卒性之謂道を以て圓滿法身となし、修道之謂教を以て千百億化身となす。影傍虛喝聞くものおどろき喜ぶ。晦庵嘗て謂へり、洪造此書を會稽に刊す。其の患洪水夷狄よりも烈しと。豈講學の要、毫釐必ず察するに非ずや。其の人既に賢なり、則ち其書盛に行はれ、其

の害未だ已まず。故甚言して以て世を警めざるを得ざらんや。蓋し上蔡の禪を云ふは、毎に禪を明言す、尙ほ直情勁行だり。臯老横浦に改頭換面を教へたり。儒を借りて禪を談じ而して復自ら禪たるを認めず。是れ偽を以て眞に易ふるが爲にして、惑はざるもの少し。」

次に張横浦の人物如何を見てみたい。

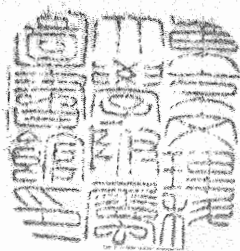
横浦は生來僞異で、八才の時に於て已に六經を默誦し、その識見は克く諸老を驚かし、十才にして文を善くした。稍長じて郡庠に遊ぶ頃には、寒暑を厭はずして終日閉閣し、膝を斂めて危坐し、外より穴もて之を窺へば恰も神明と伍するが如くであつて、人々驚服して師尊した。(横浦學案)

横浦はかく敏才であつたのみでなく、その風骨人に優れてゐたことは、「龜山弟子以風節光顯者無如横浦」によつて明かであるが、更にその剛險であつて事は、次の問答に依つて知られるのである。便宜上口譯に和けて示す。

門人が云ふには、忠厚の人は大抵寛緩であつて物を包容し、甚しく切迫することないものであるが、先生は惡を疾むこと甚だしく、喜怒の情少しも制することがなく、少しも制することがなく少しも假借することがないので、往々皆先生を以て剛躁となす。先生自ら覺る所ありや。と。横浦先生答へて曰ふには、養ふ所至れば則ち藏蓄する所がある。若し、偽りなせば之即ち眞情ではない。理の順はない所、心自ら平でない。人の惡を見て怒らないのは之れ即ち僞作であり、又姑息である。と。(横浦心傳)

時の高宗横浦の剛直を稱して、「此人獨無所畏、既而爲大方言」と云ひ、之を用ひんとしたが、秦檜の阻むところとなつて、實現はしなかつた。(横浦學案附錄)

右の記述によつて横浦の人物は略如何なるものかは知られるのである。その高俊剛骨なることは、上蔡や象山と非常に似てゐると言はねばならぬ。朱子が此の三人を比較して、上蔡よりは横浦、横浦よりは象山が衝突する所多しと云つ



てゐるのも一應肯綮に當る事であらう。

以上陸學の先河として、孟子、程明道、謝上蔡、王震澤、林竹軒の學風及人物の略説を試みた。こゝに附言しておくべきことは、以上の略説は是等數家の全貌を傳へようとしたのではないと云ふことである。即ちこれ等數家は陸學の先河であると共に、又朱學の先河でもある者が多いのであるから、右に記述したとは異つた一面もあるわけである。只この章の目的は、陸學も一日にして成るものに非ず、その由つて來る所遠く、その起るや又いはれのある事を明かにせんとしたに過ぎぬのである。